

特定の次数列を満たすランダムグラフの大きさについてⅢ

浜 口 幸 弘

1. はじめに

本稿は以前の論文（浜口（2020, 2021））の続きに相当するものである。本稿では、特定の次数列、すなわち次数 1 と次数 k の頂点から構成されるランダムグラフに対して、孤立木の存在可能性に関する定理 1, k -正則部分グラフの存在可能性について評価した定理 2, およびグラフの直径を評価する定理 3 を導出した。

2. 概念と用語の定義

まず最初に、本稿に関係する概念と用語の定義を概括する。おおむね、浜口（2020, 2021）における定義と概念の記号化を踏襲するので、ここでは、必要最小限の定義と概念を述べるものとする。

まず浜口（2021）と同様、頂点数 n のランダムなグラフ G が、 $d_1(n)$ 個の次数 1 の頂点および $d_k(n)$ 個の次数 k の頂点から構成される場合について考察を行う。以下では、この条件を満たす単純グラフを G_D として、簡単のために $n_1 = d_1(n)$ および $n_k = d_k(n)$ と記す。また次数 k は、 $4 \leq k \leq n^{\frac{1}{8}}$ を満たす n の関数とする。そして、 $2m$ をコンフィギュレーションにおける頂点の総コピー数（次数の総和）とし、基準値 α を以下のように定義する。

$$\alpha = \sum_{i=1}^{n-1} i(i-2) \frac{d_i(n)}{n} = -\frac{d_1(n)}{n} + \frac{k(k-2)d_k(n)}{n} \text{ として, } \lim_{n \rightarrow \infty} \alpha \text{ は, } 0 < \lim_{n \rightarrow \infty} \alpha < 1/2 \text{ を満たすよ}$$

うに収束する（なお以下では、十分大きな n を前提にするので、 $0 < \alpha < 1/2$ と考える）。このとき、 $n_1 + n_k = n$ かつ $2m = n_1 + kn_k$ なので、以下を得る。

$$n_1 = \frac{k(k-2) - \alpha}{(k-1)^2} n, \quad n_k = \frac{\alpha + 1}{(k-1)^2} n, \quad 2m = \frac{k + \alpha}{k-1} n.$$

また, $n < 2m \leq \frac{3n}{2}$ である.

以下では, 一定の条件下 (本稿で対象にするグラフは, この条件を満たす, 浜口 (2020) 参照) において, 単純グラフの性質は多重グラフの性質から導ける事実 (例えば, 浜口 (2020) 参照) を利用する.

3. 次数 1 と次数 k の頂点からなるランダムグラフの性質

まず, G_D に含まれる孤立木の存在に関する定理を提示する. そのために補題 1 を与えるが, これは, 浜口 (2021) で示した補題の条件部分の誤りを修正したものである. なお, 補題をこのように修正しても, 浜口 (2021) における定理の証明には何ら影響を及ぼさない.

補題 1

$0 < \varepsilon < 1$ とし, $\sigma = \sigma(n) > 0$ は, $\sigma \rightarrow \infty$ とする. そして整数 a は, $\sigma \leq a \leq \frac{\varepsilon m}{k}$ を満たすとする. このとき, 十分大きな n に対して, 以下の不等式が成り立つ.

$$\frac{1}{(2m-1)(2m-3)\cdots(2m-2a+1)} \leq \left(\frac{1}{2m}\right)^a \exp\left\{\frac{a^2}{2m}\left(1 + O\left(\frac{a}{m} + \frac{1}{a}\right)\right)\right\}.$$

証明

$y = -\log(1-x)$ ($x < 1$) のグラフは単調に増加するので, 以下の不等式が成り立つ.

$$\left(-\sum_{t=1}^a \log\left(1 - \frac{2t-1}{2m}\right)\right) \frac{1}{m} \leq \int_{1/2m}^{(2a+1)/2m} (-\log(1-x)) dx.$$

ここで, $|x| < 1$ に対して, 以下の式が成り立つ.

$$\begin{aligned} \int (-\log(1-x)) dx &= (1-x)\log(1-x) + x \\ &= (1-x)\left(-\sum_{n=1}^{\infty} \frac{x^n}{n}\right) + x \\ &= \frac{x^2}{2} + \frac{x^3}{6} + \frac{x^4}{12} + \cdots. \end{aligned}$$

この式を利用すれば,

$$\begin{aligned} &\int_{1/2m}^{(2a+1)/2m} (-\log(1-x)) dx \\ &= \frac{1}{2} \left(\frac{2a+1}{2m}\right)^2 + \frac{1}{6} \left(\frac{2a+1}{2m}\right)^3 + \cdots - \left(\frac{1}{2} \left(\frac{1}{2m}\right)^2 + \frac{1}{6} \left(\frac{1}{2m}\right)^3 + \cdots\right). \end{aligned}$$

すなわち, 以下を得る.

$$-\sum_{t=1}^a \log\left(1 - \frac{2t-1}{2m}\right) \leq \frac{a^2}{2m} \left(1 + O\left(\frac{a}{m} + \frac{1}{a}\right)\right).$$

ところで, 以下の式が成り立つ.

$$\begin{aligned}
 \frac{1}{(2m-1)(2m-3)\cdots(2m-2a+1)} &= \left(\frac{1}{2m}\right)^a \left(\left(1 - \frac{1}{2m}\right) \left(1 - \frac{3}{2m}\right) \cdots \left(1 - \frac{2a-1}{2m}\right) \right)^{-1} \\
 &= \left(\frac{1}{2m}\right)^a e^{\log\left(\left(1 - \frac{1}{2m}\right)\left(1 - \frac{3}{2m}\right)\cdots\left(1 - \frac{2a-1}{2m}\right)\right)^{-1}} \\
 &= \left(\frac{1}{2m}\right)^a e^{\left(-\sum_{t=1}^a \log\left(1 - \frac{2t-1}{2m}\right)\right)}.
 \end{aligned}$$

したがって、前述の式を用いて以下を得る.

$$\frac{1}{(2m-1)(2m-3)\cdots(2m-2a+1)} \leq \left(\frac{1}{2m}\right)^a \exp\left\{\frac{a^2}{2m}\left(1 + O\left(\frac{a}{m} + \frac{1}{a}\right)\right)\right\}.$$

□

そこで、次数 1 の頂点 i 個と次数 k の頂点 j 個からなる孤立木 (isolated trees) を $T(i, j)$ と記し、 G_D における $T(i, j)$ の存在可能性に関する定理を導く. なお、以下の定理 1 では近似計算を簡単にするために、 k の範囲に関して、 $\sigma \rightarrow \infty$ となるような $\sigma = \sigma(n) > 0$ に対して、 $\sigma \leq k \leq n^{1/8}$ とする.

定理 1

(i) $\sigma = \sigma(n) > 0$ は、 $\sigma \rightarrow \infty$ とし、 $\sigma \leq k \leq n^{1/8}$ とする. このとき、 $0 < \varepsilon < 1$ に対して、 j が $\frac{3}{\log(1+\varepsilon)} \leq j \leq \log n / \left(2 \log \frac{(1+\varepsilon)e^\alpha}{1+\alpha}\right)$ を満たすとき、ほとんどすべての G_D は $T(i, j)$ を含む.

(ii) $\sigma = \sigma(n) > 0$ は、 $\sigma \rightarrow \infty$ とし、 $\sigma \leq k \leq n^{1/8}$ とする. このとき、 $0 < \varepsilon < 1 - \frac{1+\alpha}{e^\alpha}$ に対して、 j が $2 \log n / \log \frac{(1-\varepsilon)e^\alpha}{1+\alpha} \leq j \leq \frac{n}{k^3}$ を満たすとき、ほとんどすべての G_D は、このような $T(i, j)$ をすべて

含まない.

証明

(i) 確率変数 $X^{(j)}$ をコンフィギュレーションに含まれる $T(i, j)$ の個数とする. このとき、浜口 (2021) における定理から、以下の式が成り立つ.

$$E(X^{(j)}) = \binom{n_1}{i} \binom{n_k}{j} \frac{k^j ((k-1)j)!}{(2m-1)(2m-3)\cdots(2m-2(k-1)j-1)}.$$

なお、 $i = (k-2)j + 2$ であり、辺の総数は $i + j - 1 = (k-1)j + 1$ 本であることに注意する. さて、この式を近似評価すると、以下を得る.

$$E(X^{(j)}) = \frac{n_1^i}{i!} \frac{n_k^j}{j!} k^j ((k-1)j)! \left(\frac{1}{2m}\right)^{(k-1)j+1} \left(1 + O\left(\frac{(kj)^2}{n}\right)\right).$$

ここで、確率変数 $X^{(j)}$ の順序付けられた 2 個の組を $(X^{(j)})_2 = X^{(j)}(X^{(j)} - 1)$ と記すと、以下を得る.

$$\begin{aligned}
 E((X^{(j)})_2) \\
 &= \binom{n_1}{i} \binom{n_k}{j} \binom{n_1-i}{i} \binom{n_k-j}{j}
 \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} & \times \frac{(kj((k-1)j)!)^2}{(2m-1)\cdots(2m-2(k-1)j-1)(2m-2(k-1)j-3)\cdots(2m-4(k-1)j-3)} \\ & = (E(X^{(j)}))^2 \left(1 + O\left(\frac{(kj)^2}{n}\right) \right). \end{aligned}$$

また, $0 < \varepsilon < 1$ として, 以下を得る. ただし, $n!$ の大きさの評価として, 以下の不等式を用いる.

$$e\left(\frac{n}{e}\right)^n \leq n! \leq en\left(\frac{n}{e}\right)^n.$$

$$\begin{aligned} E(X^{(j)}) &= \frac{n_1^i}{i!} \frac{n_k^j}{j!} k^j ((k-1)j)! \left(\frac{1}{2m}\right)^{(k-1)j+1} \left(1 + O\left(\frac{(kj)^2}{n}\right)\right) \\ &\geq \frac{n_1^i}{e^i} \left(\frac{e}{i}\right)^i \frac{n_k^j}{e^j} \left(\frac{e}{j}\right)^j k^j \left(\frac{(k-1)j}{e}\right)^{(k-1)j} \frac{e}{2m} \left(\frac{1}{2m}\right)^{(k-1)j} \left(1 + O\left(\frac{(kj)^2}{n}\right)\right) \\ &\geq \frac{1}{2meij} \left(\frac{en_1}{i}\right)^i \left(\frac{en_k}{j}\right)^j k^j \left(\frac{(k-1)j}{e}\right)^{(k-1)j} \left(\frac{1}{2m}\right)^{(k-1)j} \left(1 + O\left(\frac{(kj)^2}{n}\right)\right) \\ &\geq \frac{1}{2meij} \left(\frac{e}{(k-2)j+2} \frac{k(k-2)-\alpha}{(k-1)^2} n\right)^{(k-1)j-j+2} \left(\frac{e}{j} \frac{\alpha+1}{(k-1)^2} n\right)^j k^j \left(\frac{(k-1)j}{e}\right)^{(k-1)j} \\ &\quad \times \left(\frac{k-1}{(k+\alpha)n}\right)^{(k-1)j} \left(1 + O\left(\frac{(kj)^2}{n}\right)\right) \\ &\geq \frac{1}{ij} \frac{en}{(kj)^2} \left(\frac{(k(k-2)-\alpha)j}{((k-2)j+2)(k+\alpha)}\right)^{(k-1)j} \left(\frac{k(\alpha+1)((k-2)j+2)}{(k(k-2)-\alpha)j}\right)^j \left(1 - O\left(\frac{1}{k}\right)\right) \\ &\geq \frac{1}{ij} \frac{en}{(kj)^2} \left(\left(1 - \frac{\alpha}{k(k-2)}\right) / \left(1 + \frac{\alpha}{k} + \frac{2(k+\alpha)}{k(k-2)j}\right)\right)^{(k-1)j} \\ &\quad \times \left(\left(1 + \alpha\right) \left(1 + \frac{2}{(k-2)j}\right)\right) / \left(1 - \frac{\alpha}{k(k-2)}\right)^j \left(1 - O\left(\frac{1}{k}\right)\right) \\ &\geq \frac{1}{ij} \frac{en}{(kj)^2} \left(\frac{1+\alpha}{e^\alpha e^{\log(1+\varepsilon)}}\right)^j \left(1 - O\left(\frac{1}{k}\right)\right) \\ &\geq \frac{en}{k^3 j^4} \left(\frac{1+\alpha}{e^\alpha(1+\varepsilon)}\right)^j \left(1 - O\left(\frac{1}{k}\right)\right) \\ &\geq \left(2 \log \frac{(1+\varepsilon)e^\alpha}{1+\alpha}\right)^4 \frac{n^{1/8}}{(\log n)^4} \rightarrow \infty. \end{aligned}$$

最後から 3 番目および最後の不等式は, $\frac{3}{\log(1+\varepsilon)} \leq j \leq \log n / \left(2 \log \frac{(1+\varepsilon)e^\alpha}{1+\alpha}\right)$ による.

さて, これらの結果を用いて Chebyshev の不等式を適用すると, 以下となる.

$$P(X^{(j)} = 0) \leq \frac{E((X^{(j)})^2)}{(E(X^{(j)}))^2} - 1 = \frac{E(X^{(j)}(X^{(j)} - 1)) + E(X^{(j)})}{(E(X^{(j)}))^2} - 1$$

$$= \frac{E(X^{(j)}(X^{(j)} - 1))}{(E(X^{(j)}))^2} - 1 + \frac{1}{E(X^{(j)})} \rightarrow 0.$$

したがって主張は示された. \square

(ii) まず $E(X^{(j)})$ の上限を, 補題 1, 上記 (i) に示す $n!$ の評価式, および以下の不等式を用いて評価する.

$$\binom{n}{r} \leq \left(\frac{en}{r}\right)^r.$$

そして, $0 < \varepsilon < 1 - \frac{1+\alpha}{e^\alpha}$ に対して, 以下を得る.

$$\begin{aligned} E(X^{(j)}) &= \binom{n_1}{i} \binom{n_k}{j} \frac{k^j ((k-1)j)!}{(2m-1)(2m-3)\cdots(2m-2(k-1)j-1)} \\ &\leq \left(\frac{en_1}{i}\right)^i \left(\frac{en_k}{j}\right)^j k^j e^{(k-1)j} \left(\frac{(k-1)j}{e}\right)^{(k-1)j} \left(\frac{1}{2m}\right)^{(k-1)j+1} \exp\left(\frac{((k-1)j+1)^2}{2m}(1+o(1))\right) \\ &\leq \left(\frac{en_1}{i}\right)^i \left(\frac{en_k}{j}\right)^j k^j \left(\frac{(k-1)j}{e}\right)^{(k-1)j} \left(\frac{1}{2m}\right)^{(k-1)j} \frac{e^{(k-1)j}}{2m} \exp\left(\frac{(kj)^2}{m}\right) \\ &\leq O\left(\frac{n}{kj}\right) \left(\left(1 - \frac{\alpha}{k(k-2)}\right) / \left(1 + \frac{\alpha}{k} + \frac{2(k+\alpha)}{k(k-2)j}\right)\right)^{(k-1)j} \\ &\quad \times \left(\left(1 + \alpha\right) \left(1 + \frac{2}{(k-2)j}\right)\right)^j / \left(1 - \frac{\alpha}{k(k-2)}\right)^j \exp\left(\frac{(kj)^2}{m}\right) \\ &\leq O\left(\frac{n}{kj}\right) \left(\frac{1+\alpha}{e^\alpha(1-\varepsilon)}\right)^j. \end{aligned}$$

最後の不等式は, $\exp\left(\frac{k^2 j}{m}\right)$ において, $k^2 j \leq \frac{n}{k}$ が成り立つことによる. したがって, $j_1 = 2 \log n / \log \frac{(1-\varepsilon)e^\alpha}{1+\alpha}$ (注: $\frac{(1-\varepsilon)e^\alpha}{1+\alpha} > 1$) とすると, Markov の不等式から以下となる.

$$\begin{aligned} P((X^{(j_1)} \geq 1) \cup \cdots \cup ((X^{(n/k^3)} \geq 1))) &\leq \sum_{j=j_1}^{n/k^3} P(X^{(j)} \geq 1) \\ &\leq \sum_{j=j_1}^{n/k^3} E(X^{(j)}) \\ &\leq \sum_{j=j_1}^{n/k^3} O\left(\frac{n}{kj}\right) \left(\frac{1+\alpha}{e^\alpha(1-\varepsilon)}\right)^j \\ &\leq O\left(\frac{n}{kj_1}\right) \frac{n}{k^3} \left(\frac{1+\alpha}{e^\alpha(1-\varepsilon)}\right)^{j_1} \\ &\leq O\left(\frac{1}{2k^4 \log n} \log \frac{(1-\varepsilon)e^\alpha}{1+\alpha}\right) \rightarrow 0. \end{aligned}$$

よって, $P((X^{(j_1)} = 0) \cap \cdots \cap (X^{(n/k^3)} = 0)) \rightarrow 1$ であり, 主張は示された. \square

定理 1 によれば, G_D は大きさ $k \log n$ のオーダーの孤立木を少なくとも 1 つ含むことになる. これは, Molloy, M and Reed, B (1995 1998) では指摘されていない事実である.

次に, ランダムグラフにおいて, すべての頂点の次数が k である連結成分, すなわち, k -正則 (k -regular) 部分グラフの存在可能性について評価する.

定理 2

$\log n \leq k \leq n^{1/8}$ とし, j は $k+1 \leq j \leq n_k$ を満たすとする. また, kj は偶数とする. このとき, ほとんどすべての G_D は, このような頂点数 j 個の k -正則部分グラフをすべて含まない.

証明

確率変数 $X^{(j)}$ をコンフィギュレーションに含まれる頂点数 j 個の k -正則部分グラフの個数とする. 頂点数 j 個の k -正則部分グラフは孤立した連結成分となるので, コンフィギュレーションにおいて,

それが存在する確率は高々 $\frac{(kj-1)(kj-3)\cdots 1}{(2m-1)(2m-3)\cdots(2m-kj+1)}$ である. また, 最小頂点数の k -正則部分

グラフは $(k+1)$ -完全部分グラフであることに注意する. よって, 以下の不等式が成り立つ. なお, 以下では, 補題 1 および定理 1 の証明に用いた不等式を利用する.

$$\begin{aligned}
P((X^{(k+1)} \geq 1) \cup \cdots \cup (X^{(n_k)} \geq 1)) &\leq \sum_{j=k+1}^{n_k} P(X^{(j)} \geq 1) \\
&\leq \sum_{j=k+1}^{n_k} E(X^{(j)}) \\
&\leq \sum_{j=\log n}^{n_k} \binom{n_k}{j} \frac{(kj-1)(kj-3)\cdots 1}{(2m-1)(2m-3)\cdots(2m-kj+1)} \\
&\leq \sum_{j=\log n}^{n_k} \binom{n_k}{j} \frac{(kj)!}{(2m-1)(2m-3)\cdots(2m-kj+1)} \frac{1}{2^{kj/2-1}} \frac{1}{(kj/2-1)!} \\
&\leq \sum_{j=\log n}^{n_k} \frac{kj(kj-2)}{e} \left(\frac{en_k}{j}\right)^j \left(\frac{kj}{e} \left(\frac{e}{kj-2}\right)^{1/2} \left(\frac{1}{2m}\right)^{1/2} \exp\left(\frac{kj}{8m}(1+o(1))\right)\right)^{kj} \\
&\leq \sum_{j=\log n}^{n_k} \frac{(kj)^2}{e} \left(\frac{en_k}{j}\right)^j \left(\frac{kj}{e} \left(\frac{e}{kj}\right)^{1/2} \left(\frac{1}{n}\right)^{1/2} \exp\left(\frac{kj}{2n}\right)\right)^{kj} \\
&\leq \sum_{j=\log n}^{n_k} \frac{(kj)^2}{e} \left(\frac{e}{j} \frac{\alpha+1}{(k-1)^2} n\right)^j \left(\left(\frac{kj}{en}\right)^{1/2} \exp\left(\frac{kj}{2n}\right)\right)^{kj} \\
&\leq \sum_{j=\log n}^{n_k} \frac{(kj)^2}{e} \left(\frac{2en}{jk^2}\right)^j \left(2\left(\frac{kj}{en}\right)^{1/2}\right)^{kj} \\
&\leq \sum_{j=\log n}^{n_k} \frac{(kj)^2}{e} \left(8\left(\frac{4kj}{en}\right)^{k/2-1}\right)^j \rightarrow 0.
\end{aligned}$$

よって、 $P((X^{(k+1)}=0) \cap \dots \cap (X^{(nk)}=0)) \rightarrow 1$ となり、主張は示された。 \square

さて次に、 G_D 上の任意の 2 頂点間の距離の最大値、すなわち、 G_D の直径 (diameter) の大きさを考察する。グラフの直径は、グラフの大きさに関する特徴を表す代表的な基準量の 1 つである。そして、 G_D の直径を $\text{diam}(G_D)$ と記す。このとき、 G_D の直径の大きさを評価する定理を以下のように提案する。
定理 3

k は $4 \leq k \leq n^{1/8}$ とする。このとき、ほとんどすべての G_D に対して、以下の不等式が成り立つ。

$$\begin{aligned} \log\left(\frac{n}{(k^2 \log n)^2}\right) / \log(\alpha + 1) &\leq \text{diam}(G_D) \\ &\leq \log\left(\frac{2m}{k^2} \log(nk^2 \log n)\right) / \log(k(\alpha + 1)/(k + \alpha)) + 1. \end{aligned}$$

証明

対象にするランダムグラフにおいて、任意の固定した 2 つの頂点を u および v とし、確率変数 $X^{(r)}$ を、 u と v をそれぞれ端点とする長さ r のパスの個数とする。このとき、 $(kr)^2 = o(m)$ の条件の下で $E(X^{(r)})$ を求めると、以下ようになる。

$$\begin{aligned} E(X^{(r)}) &= \binom{n_k - 2}{r-1} (r-1)! (k(k-1))^{r-1} k^2 \frac{1}{(2m-1)(2m-3)\dots(2m-2r+1)} \\ &= \frac{n_k^{r-1}}{(r-1)!} (r-1)! (k(k-1))^{r-1} k^2 \left(\frac{1}{2m}\right)^r \left(1 + O\left(\frac{(kr)^2}{n}\right)\right) \\ &= \left(\frac{(\alpha+1)n}{(k-1)^2} \frac{k(k-1)}{2m}\right)^{r-1} \frac{k^2}{2m} \left(1 + O\left(\frac{(kr)^2}{n}\right)\right) \\ &= \left(\frac{k(\alpha+1)}{k+\alpha}\right)^{r-1} \frac{k^2}{2m} \left(1 + O\left(\frac{(kr)^2}{n}\right)\right). \end{aligned}$$

まず、主張の左側の不等式から示す。浜口 (2020) によれば、このランダムグラフには大きさ $\delta n/k^2$ ($\delta > 0$) 以上の連結成分 C が存在する。そして、 E を u と v がともに C に含まれる事象とし、 A_r ($1 \leq r \leq r_1$) を u と v は長さ r のパスで接続される事象とする。また、 r は $(kr)^2 = o(m)$ を満たすものと仮定する。このとき、以下の不等式が成り立つ。

$$P(A_1 \cup \dots \cup A_{r_1}) \geq P(E \cap (A_1 \cup \dots \cup A_{r_1})) = P(E)P(A_1 \cup \dots \cup A_{r_1} | E).$$

ここで、連結成分 C は大きさ $\delta n/k^2$ 以上なので、次数 k の頂点は少なくとも $\delta n/k^3$ 個ある。よって、

$$\begin{aligned} P(E) &\geq \binom{\delta n/k^3}{2} / \binom{n_k}{2} = \left(\frac{\delta n}{k^3 n_k}\right)^2 \left(1 - O\left(\frac{k^3}{n}\right)\right) \\ &= \left(\frac{\delta n}{k^3} \frac{(k-1)^2}{(\alpha+1)n}\right)^2 \left(1 - O\left(\frac{k^3}{n}\right)\right) \geq \left(\frac{\varepsilon}{k}\right)^2. \end{aligned}$$

ただし、 $\varepsilon = \frac{\delta}{2(\alpha+1)}$ とする。また、 $\binom{\delta n/k^3}{2} / \binom{n_k}{2} = \binom{n_k - 2}{\delta n/k^3 - 2} / \binom{n_k}{\delta n/k^3}$ に注意する。したがって、

$$P(A_1 \cup \cdots \cup A_{r_1}) \geq \left(\frac{\varepsilon}{k}\right)^2 P(A_1 \cup \cdots \cup A_{r_1} | E).$$

すなわち,

$$P(A_1 \cup \cdots \cup A_{r_1} | E) \leq \frac{k^2}{\varepsilon^2} P(A_1 \cup \cdots \cup A_{r_1}) \leq \frac{k^2}{\varepsilon^2} \sum_{r=1}^{r_1} P(A_r).$$

ところで, $P(A_r)$ は, Markov の不等式および先に求めた $E(X^{(r)})$ から以下のように評価できる.

$$\begin{aligned} P(A_r) &= P(X^{(r)} \geq 1) \leq E(X^{(r)}) \\ &\leq \left(\frac{k(\alpha+1)}{k+\alpha}\right)^{r-1} \frac{k^2}{2m} \left(1 + O\left(\frac{(kr)^2}{n}\right)\right). \end{aligned}$$

したがって, 前述の式において, $r_1 = \log\left(\frac{n}{(k^2 \log n)^2}\right) / \log(\alpha+1)$ とすれば (このとき, $1 \leq r \leq r_1$ は最初に掲げた前提条件 $(kr)^2 = o(m)$ を満たすことに注意),

$$\begin{aligned} P(A_1 \cup \cdots \cup A_{r_1} | E) &\leq \frac{k^2}{\varepsilon^2} \sum_{r=1}^{r_1} \left(\frac{k(\alpha+1)}{k+\alpha}\right)^{r-1} \frac{k^2}{2m} \left(1 + O\left(\frac{(kr)^2}{n}\right)\right) \\ &\leq \frac{2k^4}{\varepsilon^2 n} r_1 \left(\frac{k(\alpha+1)}{k+\alpha}\right)^{r_1-1} \\ &\leq \frac{2k^4}{\varepsilon^2 n} r_1 (\alpha+1)^{r_1} \\ &\leq 2 \log \frac{n}{(k^2 \log n)^2} / ((\varepsilon \log n)^2 \log(\alpha+1)) \\ &= O\left(\frac{1}{\log n}\right) \rightarrow 0. \end{aligned}$$

この事実は, u と v がともに連結成分 C に含まれる条件下で, この 2 つの端点間の距離は r_1 より大きいことを意味する. すなわち, G_D の直径は r_1 より大きくなる.

次に, 主張の右側の不等式を示す. まず前述と同様に, $(kr)^2 = o(m)$ の条件の下で $E(X^{(r)})$ を求めると, 以下となる.

$$E(X^{(r)}) = \frac{n k^{r-1}}{(r-1)!} (r-1)! (k(k-1))^{r-1} k^2 \left(\frac{1}{2m}\right)^r \left(1 + O\left(\frac{(kr)^2}{n}\right)\right).$$

ここで確率変数 Y を, 確率変数 $X^{(r)}$ の順序付けられた t 個 (t は固定した, 任意の正の整数) の組として, 以下のように定義する.

$$Y = (X^{(r)})_t = X^{(r)}(X^{(r)} - 1) \cdots (X^{(r)} - t + 1).$$

そして Y を, 頂点を互いに共有しない t 個のパスの組 Y_1 と少なくとも 1 個の頂点が共有される t 個のパスの組 Y_2 に分解する. すなわち, $Y = Y_1 + Y_2$ である. このとき, $(kr)^2 = o(m)$ なので, 以下の式が成り立つ.

$$\begin{aligned}
 E(Y_1) &= \binom{n_k-2}{r-1} \binom{n_k-2-(r-1)}{r-1} \cdots \binom{n_k-2-(t-1)(r-1)}{r-1} ((r-1)!)^t \\
 &\quad \times ((k(k-1))^{r-1})^t (k(k-1) \cdots (k-t+1))^2 \frac{1}{(2m-1)(2m-3) \cdots (2m-2t+1)} \\
 &= (E(X^{(r)}))^t \left(1 + O\left(\frac{(kr)^2}{n}\right) \right).
 \end{aligned}$$

一方, $E(Y_2)$ の大きさを評価すると, t 個のパスの間で少なくとも 1 個の頂点が共有されるので, パス全体の頂点を選択する組み合わせの数は, 頂点を互いに共有しない場合に比べて, r/n_k 倍以下となる. よって, 以下を得る.

$$\frac{E(Y_2)}{E(Y_1)} = O\left(\frac{r}{n_k}\right) = O\left(\frac{rk^2}{n}\right).$$

したがって,

$$\begin{aligned}
 E((X^{(r)})_t) &= E(Y) = E(Y_1) + E(Y_2) \\
 &= E(Y_1) \left(1 + O\left(\frac{rk^2}{n}\right) \right) \\
 &= (E(X^{(r)}))^t \left(1 + O\left(\frac{(kr)^2}{n}\right) \right) \\
 &= \left(\left(\frac{k(\alpha+1)}{k+\alpha} \right)^{r-1} \frac{k^2}{2m} \right)^t \left(1 + O\left(\frac{(kr)^2}{n}\right) \right).
 \end{aligned}$$

したがって, $\lambda_r = \left(\frac{k(\alpha+1)}{k+\alpha} \right)^{r-1} \frac{k^2}{2m}$ とすると, Poisson の近似定理 (例えば, Bollobás (2001) 参照) から, 以下が成り立つ.

$$P(X^{(r)} = i) \sim e^{-\lambda_r} \lambda_r^i / i!$$

よって,

$$P(X^{(r)} = 0) \sim 1/e^{\lambda_r}.$$

ここで, コンフィギュレーション上の次数 k のすべての頂点対に対して, $1, 2, \dots, \binom{n_k}{2}$ のように任意に番号付けして, i 番目の頂点対に対する $X^{(r)}$ を $X_i^{(r)}$ と記す. そして, $r = r_2 = \log\left(\frac{2m}{k^2} \log(n_k^2 \log n)\right) / \log(k(\alpha+1)/(k+\alpha)) + 1$ とすると, $(kr_2)^2 = o(m)$ を満たす. したがって, 以下を得る.

$$\begin{aligned}
 P\left(\left(X_1^{(r_2)} = 0\right) \cup \cdots \cup \left(X_{\binom{n_k}{2}}^{(r_2)} = 0\right)\right) &\leq \sum_{i=1}^{\binom{n_k}{2}} P\left(X_i^{(r_2)} = 0\right) \\
 &= \binom{n_k}{2} e^{-\lambda_{r_2}} (1 + o(1)) = n_k^2 / \left(2 \exp\left(\left(\frac{k(\alpha+1)}{k+\alpha}\right)^{r_2-1} \frac{k^2}{2m}\right) \right) (1 + o(1))
 \end{aligned}$$

$$= \frac{1}{2 \log n} (1 + o(1)) \rightarrow 0.$$

すなわち, $P\left(\left(X_1^{(r_2)} \geq 1\right) \cap \cdots \cap \left(X_{\binom{n}{2}}^{(r_2)} \geq 1\right)\right) \rightarrow 1$ である. これは, どの頂点对にもそれらの頂点对を結ぶ長さ r_2 のパスが存在することを意味するので, G_D の直径はそれ以下となる. したがって, 主張は示された. \square

上で示した直径の大きさを, Bollobás and Vega (1985) によるランダムな k -正規グラフのそれと比較すると, 次のようになる. すなわち, Bollobás and Vega (1985) による k -正規グラフの直径はおおよそ $\log n / \log(k-1)$ であるのに対して, 上の結果による G_D の直径はおおよそ $\log(n / (k^2 \log n)^2) / \log(a+1)$ から $\log(n/k^2) / \log(a+1)$ である. k が定数の場合, 直径はともに $\log n$ のオーダーになるが, そうでない場合は, かなり差 (後者の方が大きい) があることがわかる.

4. 課題

引き続き考察を行って, 次回にまとめを行う予定である.

参考文献

- B. Bollobás, *Random Graphs* (2nd edition) (2001). Cambridge Univ. Press.
- B. Bollobás and W.F. de la Vega, “The diameter of random regular graphs”, *Combinatorica*, 2 (1982).
- M. Molloy and B. Reed, “The Size of the Largest Component of a Random Graph on a Fixed Degree Sequence”, *Combinatorics, Probability and Computing* 7, 295–306 (1998).
- M. Molloy and B. Reed, “A Critical Point for Random Graphs with a Given Degree Sequence”, *Random Structures and Algorithms* 6, 161–180 (1995).
- 浜口幸弘, 特定の次数列を満たすランダムグラフの大きさについて, 明治学院大学経済研究 160 (2020).
- 浜口幸弘, 特定の次数列を満たすランダムグラフの大きさについて II, 明治学院大学経済研究 162 (2021).